

令和3年7月1日発行(毎月1回1日発行)昭和43年1月18日第3種郵便物認可 通巻775号

# 国際開発 ジャーナル

International Development Journal

国際協力の  
最前線をレポートする

JULY 2021  
No.775

7

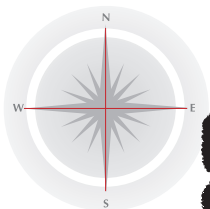
<https://www.idj.co.jp>

特集

## 危機管理の新段階

積み上がる知見と新たなリスク

IDJ REPORT ミャンマー 人権配慮必要な日本企業  
特別記事 遠隔実施で新たな活路切り拓く技術協力



# 羅針盤

主幹 荒木 光弥

## アジア・ダイナミズムの再考 原教授の「アジア研究」を追って

### アジア研究プロジェクト

筆者は、4月5日に急逝された政策研究大学院大学（GRIPS）の原洋之介教授と、最近のアジア研究があまりにも細分化されすぎているのではないか、といった議論を交わしたことがあった。例えば「国別研究」と言っても、個別の特殊な研究にのめりこむケースが目立ち、アジアを将来にわたって俯瞰・総括する地域研究が欠落しているのではないか、という指摘だ。そうした議論の下地には、かつてのように日本を中心軸に据えた「日本とアジア」ではなく、「アジアの中の日本」という認識があった。

原教授は、2019年から「アジア研究」プロジェクトを立ち上げて、いくつかの研究報告書を完成させている。報告書Ⅰは「21世紀のアジア経済をどう捉えるかーアジア・ダイナミズム再考」、Ⅱが「日本経済の150年」、Ⅲが「東南アジア経済50年」、Ⅳが「中国経済の50年」、Ⅴは「イ

ンド経済の70年」などだ。

そこで、今回はこれらの報告書の中から論点をいくつかピックアップして、原教授の研究を追ってみたい。まず、「アジア研究」についてはこう述べている。「21世紀以降、アジア経済がどのような政策課題に直面しているかを明らかにし、これから日本がアジア地域とどう接していくべきかを具体的に構想することを目的に研究会を組織した」「研究会を続けた中で、私もアジア経済が現在、20世紀とは大きく異なる状況へ直面していることを改めて確認できた。さらに、先進経済へのキャッチアップという競争で、アジア地域で先頭を走ってきた日本がアジア諸国をリードするという20世紀の構図はもはや崩れていることも明らかになった」。

そして、「21世紀のアジア経済をどう捉えるか」という序文の中で、アジアをこう捉えている。「イギリスで産業革命が始まって以来、世界経済の中心は西欧へと移動し、続いてアメリカへ移動し、

アジアは世界経済の中で周辺化していった。しかし、前世紀中頃からアジア諸国で先進国経済へのキャッチアップ型の経済成長が実現し始め、20世紀末にはすでに“中所得経済”の水準に達していた。そして現在、中国は経済規模でアメリカに次ぐ第2位の大国となっており、またインドも第3位になるものと予想されている。まさに、世界経済の中心がアジアへ回帰している。同時に、アジアの経済秩序は日本が中心であった時代から、中国の台頭もあり、多様化に向けて変化しつつある」。

そして、「歴史のこのような長期的変動を的確に回顧することなく、アジアは言うまでもなく、世界の中の21世紀のわが国のあるべき姿を構想することはできない」。

### 中所得国の罠

原洋之介氏は自分より四半世紀も若い世代の研究者・後藤健太氏の近著『アジア経済とは何か』の終章「わが国はアジアとともに未